不要ジーンズ 再び製品へ

児島の業者プロジェクト

回収したジーンズを仕分けする島田さん

倉敷市児島地区のジーンズ企画販売会社が、はかなくなったジーンズなどを糸にまで戻し、デニム製品に再生するプロジェクトに取り組んでいる。ファッション業界で「サステナブル（持続可能）」に関心が高まる中、資源の有効活用を進めることが狙い。全国80カ所で今月末まで古着を回収しており、年内に生まれ変わった製品を販売する予定。（浪速祐彦）

プロジェクトは「FUKKO（フッコ）」の名称で、イトナミ（同市児島唐琴町）を経営する山脇耀平さん(28)と弟の島田舜介さん(26)が企画。2人は2015年に、ジーンズのブランド「エブリデニム」を立ち上げ、創業から5年を迎えた昨年10月、「暮らしを営む中にブランドがあってほしい」などの思いから名称変更。不要なジーンズを再び新製品へと「復刻」する試みに乗り出した。

2人は知人のつてなどを頼りに協力先を探した上で、4月下旬から綿素材のデニムを対象に回収作業を開始。同社が運営する宿泊施設「デニムホステル フロート」（同所）を拠点に、企画の趣旨に賛同したゲストハウスやカフェなど北海道から沖縄県までの約80カ所で受け取っている。同ホステルは郵送でも対応している。

糸に戻し「復刻」 月末まで回収、年内販売

集めたジーンズは、紡績会社に依頼して綿状に戻し、新たなオーガニックコットンを5割の比率で混ぜて糸にリサイクル。福山市の織布メーカーがデニム生地にする。今回は染めの工程は行わないため、回収した製品の色が反映された仕上がりになるという。

再生した生地を使い、イトナミブランドのジーンズをはじめ、回収拠点と共同でエプロンやパジャマ、羽織などを作る。同社は「ブランドからの一方通行ではなく、多くの人が参加できる取り組み。ジーンズ千着の回収と、長さ千㍍の生地作りを目標にしており、ぜひ協力してほしい」と呼び掛ける。

問い合わせはメール（info@ito-nami.com）。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2021年6月13日 山陽新聞朝刊 26ページ